
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 16

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 301.バラ
- 302.開かれたドアに向かって
- 303.思考の螺旋運動と意味の総体
- 304.身土不二
- 305.自己超出・自己超越
- 306.対人支援産業について思うこと
- 307.言語能力を変容させる論文執筆
- 308.欧州小旅行記:ドイツ北西部のリアーに向かって
- 309.欧州小旅行記:ハノーファーに向かって
- 310.欧州小旅行記:ライプチヒに向かって
- 311.欧州小旅行記:シューマン博物館で訪れた「確信」
- 312.欧州小旅行記:メンデルスゾーンの虹色の音楽を浴びて
- 313.欧州小旅行記:バッハ博物館を訪れて
- 314.欧州小旅行記:CNNのニュースより「進化しない人類」と「人間に還ること」
- 315.欧州小旅行記:シュツットガルトへ向けて「豊かな知性を育む環境」
- 316.欧州小旅行記:ヘーゲル博物館を訪れて
- 317.欧州小旅行記:景観美を体現した街、スイスのニューシャテルへ向かって
- 318.早朝のニューシャテル湖を眺めて
- 319.フリードリヒ・デュレンマツ美術館を訪れて
- 320.欧州小旅行記:ニューシャテル自然史博物館と追想

301. バラ

フローニンゲンの街で、いつかどうしても訪れたい庭園があった。ここは、静かにそして華やかにバラが咲き誇る庭園だ。

フローニンゲンの街をランニングした後の帰り道、まだ通ったことのない道を走ろうと思っていたところ、偶然ながらこの庭園へ行き着いたのだ。あたりに目新しいものを探そうとするような意識を持っていたわけでもなく、真剣に前へ向かって進んでいると、左目の周辺視野の中に、周りとは違う空間が広がっているのを捉えた。

それがこの庭園だったのだ。後から調べてみて、この庭園はフローニンゲンの街の象徴であるマルティニ塔のすぐ裏手にあることがわかった。この場所にはいつか必ず訪れようと思っていたが、往々にして「いつか」という日はいつまで経ってもやって来ないものである。しかし、そのいつかは偶然にも向こうからやって来たのだ。

ここはとても小さな庭園なのだが、自然に触れられるこうした場所があるだけでも、周りに住む人々の心はだいぶ変わってくるのではないかと思わされる。ランニングの最中であつたため、手元に現金はなく、この庭園に入ることができるのか心配であつたが、入園料というのはかからないようだった。

入園し、手入れの行き届いた緑のアーチに囲まれた道に入り込んだ瞬間、表現が難しい感覚に包まれた。それは迷路の中で彷徨っているような感覚であると同時に、未だ見えぬ出口に希望を見出しているような感覚だったのだ。

そうした感覚に付随して、ここ最近の決まりごとかのように過去の記憶が蘇ってくる。過去の記憶というのはもしかすると、単純に過去に経験した出来事を想起するような類いのものではなく、絶えず現在と紐付いている生きた感覚なのではないか、と思わされるのだ。

なぜだかわからないのだが、私はこの庭園のメインスポットで壮麗に咲くバラ達よりも、多くの人々が素通りするような箇所にもましく咲いているバラに対して、惹きつけられるような魅力を感じていたの

だ。控え目に咲くこのバラの奥に、大事な何かが隠されているに違いない、そんなことを思わされた。

庭園をそよ風が吹き抜ける。あたりを見回すと、庭園の中にあるカフェで談笑をしている人たちの姿が見える。慎ましく咲いているこのバラは、そうしたそよ風やカフェで談笑する人たち、そしてバラを見ている私を含めて、諸々の関係性の中に存在している、とすることができるだろう。

しかしそれ以上に重要なのは、このバラはバラとして全てを超越してただそこにある、ということの中に、存在の消し去ることのできない固有の価値が宿っているような思いに至ったのだ。

302. 開かれたドアに向かって

フローニンゲンの新居に住み始めた頃、部屋のドア以外に、建物の中にそもそも入るためのドアがあり、そのドアの閉め方がいまいちよくわからなかった。鍵穴に鍵を通してみても、うまく閉まらないのだ。

このドアを閉めるために、鍵が不要だと気付くのに三日かかった。どうやら鍵を差し込んでこのドアを閉めるのではなく、オートロックのようなのだ。

このドアの風貌がオートロックらしからぬものだったので、大変紛らわしかった。ドアを閉めることに苦戦を強いられたことにより、人生において新たなドアを開けることの性質について考えていた。

これは私に限ったことではないと思うが、これまでの人生において、幾度となく目の前のドアが閉ざされてきた。そのたびに落胆をしたり、自分の不甲斐なさを嘆いたり、様々な種類の感情と向き合わざるをえない状況に直面してきた。

ちょうど米国の大学院を卒業する間際に自分の望むような進路が閉ざされた時、偶然ながらプログラム長のヴァニース先生と面談をする機会を得た。ちょうどそれは、今から三年半前のことであった、と懐かしく思い出していた。

ヴァニース先生の部屋で一对一の面談をしたのは、ジョン・エフ・ケネディ大学に到着した最初の週に一回と、後はプログラムの途中のどこかで一回ぐらいであり、卒業間際のその面談を含めると、合計で三回ぐらいしかなかったと記憶している。

そうした限られた面談回数のせいもあるだろうが、とりわけ最後の面談で話した内容を鮮明に覚えている。その時の私は、米国の他の大学院に残って研究を継続させようと思っていた。しかしながら、その大学院から受け入れられることはなかったため、見通しのつかない自分の今後に対して、暗澹たる気持ちのまま、ヴァニース先生との面談を迎えた。

その時は、特別に進路に関して相談をしようと思っていたわけではないが、私の表情を見て何かを察知したのだろうか、ヴァニース先生の方から、私の今後に関する話を持ちかけてきたのだ。事の顛末を伝えると、「人生の中で一つのドアが閉ざされた時、必ず開かれるドアが現れるのよ。洋平の目の前には新たなドアが開かれているから大丈夫」という言葉をヴァニース先生はかけてくださった。

その言葉に、私はひどく救われた気持ちになったことを今でも忘れていない。ヴァニース先生からの言葉かけがあるまで、私は閉ざされたドアしか見えておらず、あるドアが閉ざされることによってしか開かれえぬドアがあることを知らなかったのだ。

自分の人生において、目の前に幾度となく閉ざされたドアが立ちふさがってきたことを思う。それでも私は歩き続けることを決してやめなかった。閉ざされたドアにぶつかった時、そこで呆然と立ち尽くすのではなく、歩き続けることが大事なのだ。

そうすれば、新たに開かれたドアがきっとどこかで自分を待っていてくれるのだ。閉ざされたドアから開かれたドアへ。

新たに開かれたドアの先には、これまで見たことのない光景が広がっていることを信じて、これからも無数の閉じられたドアにぶつかり、新たなドアを開き続けていくのだろう。そのようにしか、私は自分の人生を歩んでいくことができない。

303. 思考の螺旋運動と意味の総体

昨夜は、珍しくなかなか寝付けなかった。昨日は欧州小旅行に向けて、各国の電車やホテルの予約にあれこれと頭を使っていたため、旅のイメージが一举に出来上がり、巨大なイメージの総体が自分に押し寄せてくるかのようだった。

旅のイメージが自分にやってくるのと並行して、ある種の高揚感のようなものが自分の中で沸き上がり、それが寝付きを悪くさせていたのかもしれない。それにしても奇妙だったのは、欧州小旅行における最初の滞在地であるライプチヒは音楽の街として有名であり、その街の特性が早くも自分を捉えようとしていたことである。

どのようなことが自分に起こっていたかという、幾つかの代表的なクラシック音楽の楽曲が重なり合い、就寝しようと思っていた私の耳に、地鳴りのような幻聴として聞こえてきたのだ。轟音とも形容できるこの幻聴には随分と驚かされたが、全くもって不快な音ではなかったことも興味深い。

確かに昨夜の寝付きは良くなかったが、一夜明けてみると、すっきりとした目覚めと共に、今日という一日を始めることができた。起床直後、昨日考えていたテーマについて、またあれこれと思考が運動をし始めた。

昨日掴もうとしていたテーマについて、今日も再び考えている自分を見るにつけ、私たちの関心事項というのは、つくづく輪転するものなのだと思うされる。つまり、私たちは毎日違うようなことを考えていると思っていながらも、それらを一段高い所から眺めて分類すると、ほとんど同じカテゴリーに属するテーマについて繰り返し考えていることがわかるのではないか、ということだ。

これはダイナミックシステム理論の観点からも納得の行く性質だと思った。どういうことかという、私たちの思考という動的なシステムの挙動は、ある臨界点を超えるまでは同じ階層内をぐるぐると動き回るのである。

ただし、重要なこととして、思考テーマがいかに堂々巡りのように思えても、思考の円転運動によって、新しい意味がそこに開かれていく可能性があることを忘れてはならない。結局のところ、私が日々

の思念や感情に言葉を当てようとしているのは、こうした旋回するテーマを確実に捉え、そこに新しい意味を付与しようとしていることに他ならないのではないかと気づかされた。

それはさながら、繰り返し現出する一つのテーマという意味の総体に対して、新しい意味を徐々に付け加えていく作業に他ならない。こうした作業は一夜で成し遂げられるものではなく、決して一足跳びに新たな意味の総体を築き上げていくことはできないのだ。

こうした意味の総体こそ、特定領域における知性発達の産物と言えるだろう。私たちはある知性領域において、徐々に新たな意味を付け加えることによって、一つの大きな体系(システム)を築き上げていくのだ。そのように考えると、意味の総体を構築していくというのは、思考の円転運動によってというよりも、思考の螺旋運動によってである、と述べた方がよりのを得ているだろう。

そして、このような意味の総体を築き上げていくときに重要になるのは、いかに思考テーマが同一のものに思えたとしても、それに臆することなく、新たな意味を付与する可能性を探りながら思考運動に従事することだと思う。

往々にして私たちは、日常生活の中でふと湧き上がってくる考えを取るに足りないものとみなしがちだが、実はそこに意味の総体をより堅牢にするための材料が眠っていると思うのだ。こうした建築材料と向き合うことによって、私たちはより強固な意味の総体を構築することができるのではないだろうか。

また何よりもこうしたプロセスこそが、システム構築的な特性を帯びた知性発達の肝なのである。螺旋運動を行う思考や感情を確実に捉え、それらに絶えず言葉を与えていくこと。そうした実践の先に、まだ見ぬ巨大な意味の総体が現れてくると思うのだ。

304. 身土不二

これまで様々な海外都市で生活してきたが、ある時から心がけていることが一つある。それは、その土地固有の食物をできるだけ摂取するということである。

確かに私は生粋の日本人であるから、海外生活の中で日本食を口に入れた時には、なんとも言えない安堵感を覚えるが、それでもなるべく現地の食材とご当地料理を食べるようにしている。こうした行動論理に導いてくれたのが、マクロビオティックの提唱者であり、思想家かつ食文化研究者の桜沢如一(さくらざわゆきかず:1893-1966)先生である。

桜沢先生が提唱した食物理論の根幹には、「宇宙全てのものが陰陽から構成されている」という「無双原理」が存在している。私は桜沢先生の思想に大いに共感しているが、マクロビオティックを実践しているわけではない。

私が唯一心がけている食物実践は、桜沢先生の食物理論の中でも重要な概念である「身土不二」に基づいて、食べ物を摂取することである。身土不二とは元来、仏教の世界における言葉であり、私たちの身体と土地(環境)は切り離せない、という考え方である。

こうした仏教の世界観を出発点とし、明治期に起こった食用運動に後押しされる形で、石塚左玄という軍医が身土不二の仏教用語を食物理論に拡張適用し、「地元の食べ物や旬の食べ物が身体に良い」という考え方を提唱したのだ。実は、このあたりの話は全て、ロサンゼルス時代の合気道の師匠である松岡春夫先生から伺ったものである。

松岡先生は、以前紹介したように(記事247参照)、「洋平さん、『敗北』という言葉の由来を知っていますか? 古代中国において、ぬくぬくとした環境で生活をしていた南の国の連中が、極寒の厳しい環境で生活していた北の国の連中に敗れたことに由来しているそうです。なので、自己の鍛錬のために、洋平さんも北に行くといい」という言葉を掛けてくださった方である。

松岡先生との出会いは、ロサンゼルス到着後の間もない時であり、当時の私には全く門外漢であった合気道や武道について、先生から色々と教えてもらったことを覚えている。その時に合気道に大変興味を持ったが、実際に合気道を始めたのはその半年後からであった。

当時、ロサンゼルスの滞在期間がわずか一年とは予想しておらず、もう少し早く先生の下で合気道を始めておけばよかったと思ったが、ロサンゼルスの最後の半年は、本当に足しげく道場に通わせていただき、クラスの終了後も雑談と合わせて各種の秘伝を伝授していただいたことが非常に懐かしい。

現時点での自分が持っている最良のものを全ての人に出し惜しみなく提供するという。有段者でも今日から合気道を始めた者でも関係なく、とにかく自分が習得した秘伝を真っ先に公開すること。その結果として、自分を超越するような存在が出てきても落胆することなく、むしろ歓迎するという先生の姿勢に、大変感銘を受けたのを覚えている。

振り返ってみると、松岡先生は私にとって、ロサンゼルス時代の大きな精神的支えだったように思う。自分の抱える苦悩や葛藤を他者に打ち明けることをほとんどしないにもかかわらず、松岡先生にだけは相談に乗ってもらったのだ。

そうした行動に仕向けたのは、上述のような先生のお人柄が一番の要因だろうし、合気道の技術を高めることに日々精進されておられることのみならず、ご自身の思想を深化させるべく仏典解釈にも余念がないという求道者的姿勢に共感と信頼を持ったからだろう。

そのようなことを思い出しながら、オランダでの現在の生活において、身土不二に基づいた食物実践をしていることに気づかされる。オランダはチーズなどの乳製品で有名であり、実際にオランダに来てからチーズを多く摂取するようになり、わずか数日足らずで肌の調子に大きな変化が見られたことは驚いた。

そうした目に見える形での効用のみならず、チーズを含めて、オランダの現地人が食べるものを摂取することによって、この国への順応がより速やかに進行していることを強く実感するのだ。

ジェームズ・ギブソンの生態心理学しかり、ダイナミックシステム理論しかり、私たちという存在は取り巻く環境と密接不可分であり、なおかつ相互作用しているというのは、食生活においても当てはまるのだということを強く実感させられる毎日である。

心の発達是一生涯継続していき、身体の発達は成人で止まるとわかっていながらも、これから毎日チーズをある一定量摂取すれば、オランダ人のように大きくなれるかもしれないという淡い期待がある。そうした非現実的な淡い期待を抱きながらも、真に望むことは、オランダという土地でしか育むことのできない内面の深化を時間をかけて行っていくことだろう。

305. 自己超出・自己超越

この10年間ほど、毎日昼寝を欠かしたことはないように思う。どうも昼食を食べた後の午後二時過ぎあたりに、眠気と共に集中力が減退する瞬間が訪れることに気づき、15分から20分ほどの仮眠を必ず取るようにしている。

いつもと同じように、ヨガのシャバーサナの姿勢で仮眠を取っていると、あることに気づいて突然飛び起きた。どうもこれまでは「言葉が感覚に当てる」という表現を用いていたが、実態としてはそうではなく、「感覚が言葉に当たる」という表現の方が、随分と正確なのではないかと気づいたのだ。

感覚が感覚としてではなく、感覚が言葉として姿を表すことに気づいた時、居ても立っても居られなくなり、昼寝から飛び起きたのだ。感覚というのは、本来的に言葉の形を取るような余地を残しているのか、あるいは、感覚というものは、本質的に言葉の原形態のような存在として、私たちの内側に生起しているのかもしれない、と思わされた。

そうしたことを考えてみると、内側に現れる感覚に対して、自分の中であれこれと言葉を選択して当てはめようとするよりもむしろ、しかるべき言葉がしかるべき時に現れ、それがしかるべき言葉の形になろうとする瞬間を逃さないことが重要になるのではないかと、思ったのだ。

とはいえ最初のうちは、私たちの感覚は認知世界をすりと通り抜けてしまうような性質を持っているため、言葉によってその感覚の一端でも捕まえようとするような試みが必要になる。言葉によって感覚の把握ができるようになってくると、感覚は自ずと私たちの認知世界の中で言葉としての形態をとり始める。

その瞬間さえ逃さなければ、感覚は自分に最もふさわしい肉感を伴った言葉として立ち現れるようになる、と考えている。昼寝から目覚めてそのようなことを考えさせられた。

そもそもこうした考えを生む触媒になったのは、昼寝前の午前中に読んでいた“Identity and emotion: Development through self-organization (2001)”という書籍だろう。この書籍は、私の論文アドバイザーであるサスキア・クネン先生が編集者の一人として関与し、特に自我と感情の発達をダイナミックシステム理論の観点から研究した論文が多数収められている良書である。

私がクネン先生に師事することにしたのは、現在欧州で活躍する研究者の中で、彼女はロバート・キーガンの構造的発達理論やカート・フィッシャーのダイナミックスキル理論に関して、最も造形の深い学者だからだ。また、応用数学のダイナミックシステム理論を活用した研究においても優れた業績を多数残しており、ダイナミックシステム理論を初めて本格的に発達研究に適用したポール・ヴァン・ギアートと共に「フローニンゲン学派」を形成したことも知られている、ということも彼女に師事するきっかけになった。

この書籍でも言及されている「自己超出」あるいは「自己超越 (self-transcendence)」という言葉がどうもここ数日間頭を離れなかった。というのも、直近の一年間において、見えない壁のようなものが自分の前に立ちふさがり、その壁を乗り越えていかないように自分を制御しているような何かが、内側に存在している感覚があり、その感覚と「自己超出」や「自己超越」という言葉が強く結びついてるように思われたのだ。

これらの言葉はどれも誤解されがちであるが、それらは現実世界とかけ離れた天上界の住人になることを決して意味しない。これらの言葉には、自己が自己自身を超えていくという意味と、自己が自我を超えていくという二つの意味があるのだと思う。

前者に関しては、ダイナミックシステム理論で言う「自己組織化」の考え方を引用するとわかりやすいだろう。私たちには、絶えず自らを作り出していくという自己産出の働きが備わっており、既存の自己が質的に新たな自己を産出するときに、自己超出や自己超越が起こるのだ。

一方、後者の意味は、構造的発達心理学の文脈における「自己超越段階」の特徴と密接に結びついたものだと考えている。私たちは確固たる個を確立する段階——キーガンの段階モデルでいう段階4——からさらに進化を遂げる時、確立した自我を徐々に越えていくような運動を開始するのだ。

ただし注意が必要なのは、集合意識が慣習的段階にとどまる現代社会においては、基本的にこうした強固な個を確立することですら難しい状況にあり、確立した自我を乗り越えていくことはさらに困難である。

こうした一大事業が開始されるためには、そもそも自我の絶対的な成熟が必要であり、成熟し切った自我からの大きな抵抗に直面するという課題とぶつかることが求められるのだ。成熟を遂げた自我の最後の抵抗は、極めて強力・強烈なものであり、それを乗り越えるためには、多大な苦痛とエネルギーが不可避に要求される。

カール・ユングも指摘しているように、強固な自我の構造を確立することが「個性化」の真に意味することであり、頑強に構築された自我を乗り越えていくのが自己超越の道である。自己を超えていくことの意味と、それが不可避に内包する苦痛が見過ごされがちな傾向にあるため、上記のようなことに考えを巡らせたのだろう。

306. 対人支援産業について思うこと

「洋平、それは自分よりもサスキアの方が詳しいから、彼女に質問してみることをお勧めするよ」ということを、私がフローニンゲン大学で在籍するプログラムの責任者であるルート・ハータイに言われたことがある。

ルートの対応はいつも実に誠実かつ紳士的であり、彼は私のメンターでありながらも、彼とは一生涯友人としての交友関係を持ちたいと思うような人物だ。これは何もルートに限ったことではなく、カート・フィッシャーなどの優れた研究者の方々と話した時にも感じたのだが、自分の専門領域が何なのかを熟知し、その分野に対して誠実な研究者ほど、自分の専門以外の話題を問われた際には、他のスペシャリストがいればその人物を紹介する、ということが慣行として行われているように思う。

こうした慣行は何も、自分の専門分野に固執して、自分の専門領域以外のことには関心がない、という態度を表しているのではない。それとは真逆であり、自分の専門領域を適切に把握し、自分の専門分野以外の研究にも等しく関心を払っているために、自分よりもふさわしいと思う人物を紹介する、という態度の表れなのだと思う。

ここでふと考えさせられたのは、人間の発達や治癒に関わる対人支援者は、しかるべき時に、しかるべき人物にクライアントを紹介できるだけの資質を持ち合わせているのかどうかという点だ。

ジョン・エフ・ケネディ大学在学中に、私はカナダに赴き、インテグラル理論をもとにした発達支援コーチングの専門資格を一年間かけて取得した。資格を取得して以降、発達支援に特化した知識とスキルを向上させるべく、最初は大学の関係者を中心に様々なクライアントを募っていた。

その時、60歳を越す一人の神父が私のコーチングを受けたいと願い出てきたのだ。最初のセッションですぐにわかったのだが、この神父が抱えているトピックというのは、キリスト教に関する深い知識がなければ到底理解できるようなものではなかったし、この方が同性愛者であるという点においても、性に関する心理学的な知識がなければ話を正確に理解することはおろか、この方の支援を行うことなどできないと思ったのだ。

そうした理由により、私は他のコーチを紹介することにした。サンフランシスコ在住時代は、サイコセラピストの方と交流を持つことが多かったので話を聞くと、米国のサイコセラピーの現場においては、自分の専門知識とスキルを勘案し、クライアントが抱える課題が自分の手に負えない場合、他のサイコセラピストを紹介(リファー)することが、ほぼ義務付けられていると言っても過言ではない、ということを知った。

思うにこうした慣行は、クライアントの利益を最優先させるために不可欠なものであり、セラピストが自分の力量を遥かに上回るクライアントを無理に支援しようとするのは、クライアントにとって百害あって一利なしだと思うのだ。

これはもちろん、クライアントの精神的な治癒を支援するサイコセラピストのみならず、クライアントの精神的な発達を支援するコーチにも等しく当てはまる話だろう。「コーチング」と一口に言っても、それが意味する射程は非常に広く、自分の専門分野が何であり、守備範囲はどこまで及んでいるのかを、コーチは的確に把握しておく必要があると思うのだ。

それらが特定できないというのは、明らかに三人称的視点の欠如であり、こうした三人称的視点はロバート・キーガンの段階モデルで言うところの「段階4」に到達するあたりで芽生え始めてくるものである。そのため、三人称的視点の欠如は、そのコーチが慣習的段階に留まっていることをそっくりそのまま示すのだ。

私自身もリファアーの数は一つだけであり、単純に数の問題に還元することはできないが、それでも、しかるべき時にしかるべき人物にどれだけリファアーすることができたかが、ある意味その対人支援者の倫理能力と自己客体化能力を如実に映し出していると思うのだ。

「コーチングというのは、コーチがしかるべき知識とスキルをそれなりに持っていれば、どんなクライアントに対しても支援が行える」というのは、コーチング関係者の戯言に過ぎず、往々にしてそうした発言の出元は、商業的な地位をより強固なものにしようとするコーチング業界の慣習的なスローガンに他ならない。

コーチング業界が経済的に繁栄をするためには、多くの潜在的なクライアントが必要であり、そうした多数の潜在的なクライアントを獲得することをコーチに促すような意図が、上記の甘言に内包されているのである。

これは私の周りにいるコーチ達自身から聞いた話だが、日本のコーチング関係者の中には、未だ上記のような発想を保持している方が多いそうだ。多くのコーチがそうした発想を未だに保持していること自体が、慣習的な物の見方に縛られていることの明確な証拠に他ならず、日本のコーチング業界の未成熟ぶりが露呈されていると思う。

対人支援者にとって何にもまして重要なことは、自分の狭い発想と自分の小さな器にクライアントを押し留めないことだと思うのだ。自分の力量を遥かに凌ぐ課題を持ち合わせたクライアントに遭遇した時、どれだけリファアーできるのかが、対人支援産業の今後の質と発展に関わってくるのだと思う。

少なくとも、「紹介する勇気」を持ち得ない対人支援者は、対人支援の専門家としての資格はないだろう。

307. 言語能力を変容させる論文執筆

研究者としての留学が本格的に始まるまで、いよいよ二週間を切った。時間的に余裕があるため、学位取得論文に関して、今のうちから準備を進めていきたいと思う。修士論文を執筆するのは、米国ジョン・エフ・ケネディ大学時代を含めて二回目となるが、今回の修士論文は、研究者としての今

後の自分を大きく左右するものである、という位置付けをしているため、綿密かつ最大限の力を注いで取り組みたいと思う。

おそらく、この論文を書き上げることから研究者としての真の意味での第一歩が始まるのだと認識している。つまり、今回のフローニンゲン大学での修士論文を無事に書き上げることができて初めて、知性発達科学者としてのスタートラインにようやく立てるのだと思っている。

今回の論文を単に学位取得のためのものとするのではなく、修士論文の内容を改良する形で主要ジャーナルに投稿したいと考えている。それぐらい、この論文にどのような内容とどのような質を持たせるかが重要なのだ。

フローニンゲン大学で修士論文を執筆するためには、大学が公開している修士論文作成要項を丹念に読むことが重要になると思う。というのもこの要項を見ると、実に細かく論文の評価項目が記述されているからである。

論文のどういった項目をどのように評価するのかを適切に把握しておくことが、学位取得論文をスムーズに書き上げることに有益だと思う。また私の場合、4つ目の修士号を取得した後に、博士課程への進学を考えているため、修士論文の評価も優れたものにしておく必要がある。

そのため、この修士論文要項を見ながら、現時点で評価がどれくらいなのかを論文アドバイザーのクネン先生に逐一確認し、最終的には、全ての項目を最高評価に持っていくような論文作成戦略を採用しようと思っている。今回のプログラムに応募する前から、修士論文の概略を思い描いていたので、今後少しずつ言葉を与えながら、内容を徐々に洗練させていきたいと思う。

これは一番骨の折れる作業なのだが、九月からのプログラムが開始するまでに、データの整理に取り掛かろうと思う。すでに研究の仮説を立てているため、何はともあれ、研究を進めるためのデータの整理をしなければならない。

それでは、論文執筆へ向けた自分の頭の中の整理も兼ねて、論文のどのような項目が評価されるのかを列挙してみたい。

(1)概要、(2)研究手法、(3)研究結果、(4)ディスカッション、(5)要約、(6)文献目録、(7)語彙の使用、(8)図表、(9)研究デザイン、(10)その他、という大きな評価項目がある。これらの10個の評価項目がさらに細分化されており、細分化された項目に対して評価点が与えられ、最後に論文の総合評価が1から10段階で下される。

これから論文を執筆するに当たって、絶えず上記の10項目を確認しながら研究を進めていきたいと思う。

学士論文を含めて、論文を執筆したことのある方であれば、思い当たる節があると思うのだが、論文を書き上げる前後で自分の言語能力に変化が生じるのは興味深い点だろう。良かれ悪しかれ、学術論文を執筆すると、英語・日本語を問わず、必ず自分の文体が変化することに気づいている。

これは以前紹介したように、文章を書くことによる効果の一つだろう。つまり、一つ一つの言葉の使い方を含め、文章全体の構成を試行錯誤しながら、一つのまとまりとして学術論文を執筆するという実践は、自分の専門分野に関する知識と経験を体系化させることに大きく寄与するのだ。

今回の論文を執筆した後に、自分の言語能力にどのような変化が生じるのだろうか。また、専門分野に関する知識と経験がどのように体系化され、体系化された後の産物はどのようなものなのか、それらの未知な事柄に対して楽しみにしている自分がいるのは確かなようである。

308. 欧州小旅行記:ドイツ北西部のリアーに向かって

今日からいよいよ欧州小旅行が始まった。早朝五時前に起床し、いつも通りの身体・精神エネルギーであることを確認したが、やはりこれから欧州旅行が始まるからであろうか、身体も精神も共に軽やかな感じがした。

シャワーを浴び、わずか二週間しか住んでいない今の新居に対して、随分とお世話になっているような気がしたので、これから少しばかりもぬけの殻になる自宅に挨拶をして、五時半に自宅を出発した。日中ただでさえ静かな環境を提供してくる自宅の周辺が、絵も言えぬ静けさに包まれていることに気づいた。

フローニンゲン駅へ向かう最中、瞑想実践と歩行運動が合一したような歩行禅を行っているかのような感覚になり、静けさに包まれた空間の中で時折聞こえる鳥の鳴き声や新聞配達バイクの音などが、自分の内側に向かって生のまま入り込んでくる。日常生活において混じり合っただけで聞こえてくるこれらの音が、一つ一つ独立した形を持って裸体のまま自分へ向かってくるような感覚だ。

駅へ向かう最中、運河を架橋する橋の上で時々遭遇する「ぬりかべ」も早朝のこの時間には出現しないようだ。欧州小旅行の最初の滞在地であるライプチヒに行くには、まずフローニンゲンからドイツ北西部の「リアー(Leer)」という街に行く必要がある。

フローニンゲンからリアーまではシャトルバスが運行しており、バスの到着場所を探そうとした。「バス停の場所はずでに知っているのだが、NS600のバスはどこかな？」と目的のバスを探していたが、どうにも見つからない……。30分ほど早く駅について正解だったと思いながら、多数の路線を走るバスの表示ナンバーを焦らずに全て確認した。

しかし、それでも目的のバスが見当たらなかったため、偶然にも一台だけ停車していたバスの運転手に確認すると、「ああ、このバス停は市内運行のバスしか停まりませんよ。シャトルバスはタクシー乗り場の前です」と告げられた。

この運転手にお礼を述べ、「シャトルバスはタクシー乗り場の前かあ〜。これまた非常にわかりにくい」と思いながら、シャトルバスが停まると告げられたバス停に向かう。古びた表示板をゆくゆく眺めてみると、確かにここがシャトルバスの停車場所だとわかった。しかし、AとBの二つの乗り場のうち、どちらにも「リアー行き」という表示がない。正確には、Bの乗り場には別の目的地しか書かれておらず、Aの乗り場の表示板は剥げていたのだ。

7分前になってもシャトルバスが来る気配が感じられなかったため、“Bus instead of train”とE-ticketに表示されているにもかかわらず、何を血迷ったか「これはシャトルバスという名の電車に違いない！」と思考を切り替え、バスの運転手が親切にも教えてくれたシャトルバスのバス停らしき場所を離れ、電車が止まる駅構内に急いで向かった。

駅に着くと、これまで意識したことはなかったが、改札口のすぐそばの線路に、路面電車のようなものが運行しているらしいことに気づいた。そして路面電車の案内が書かれた張り紙を見ると、「6時半発リアー行き」があるではないか。

一瞬安堵感に包まれたが、電光掲示板にはリアー行きが表示されていない。やはり何かがおかしいと思い、駅構内から先ほどのシャトルバスの待ち合わせ場所を遠目から確認すると、表示が剥げていたバス停に一台のバスが到着していたのが見えた。二転三転頭を即座に切り替え、急いでそこへ向かった。

バスから降りてきてタバコを吸い終わった運転手がバスに戻ろうとしているところを、私はなんとか捕まえた。

私:「おはようございます。す、すみません。これはリアー行きですか？」

運転手:「ええ、そうですよ。」

私:「よかった～。どれがリアー行きのバスか全然わからなくて。」

フローニンゲンの静寂な街を歩行禅で味わっていた先ほどの意識状態はどこに行ったのだろうか？早朝から意識の状態が激しく乱高下させられたことに対して、旅の先行きがどうなることやらと思わされたその瞬間、私の背後から声が聞こえた。

旅行者らしき若い欧米人男性A:「これリアー行き？」

運転手:「ええ、そうです。」

旅行者らしき若い欧米人男性A:「うわぁ～、よかった～。かなり迷ってたんだよね～。」

私:「僕もです(笑)。」

旅行者らしき若い欧米人男性A:「だよね～、わかりにくいよな(笑)。おい、これがリアー行きのバスだってよ。」

旅行客らしき若い欧米人男性B:「えっ、これなの？よかった〜。」

フローニンゲンという街はつくづく私に試練を課すのだな、と思っていたが、この街は平等に万民に対して試練を課すのだとわかった。

旅行客らしき若い欧米人男性A:「チケット持ってないんですけど、この場で買える？」

運転手:「えっ、チケットを持ってないんですか？まあ、この場で買えますけど。」

旅行客らしき若い欧米人男性A:「よかった〜、じゃあ友人の分も含めてこれで(50ユーロを提示)。」

運転手:「お客さん、このお札は大きすぎます。」

旅行客らしき若い欧米人男性A:「うわちゃ〜、最悪、細かいのないしな〜。」

バスのほぼ先頭に陣取っていた私は、このやりとりの一部始終を見ることができ、20日前に日本を出発する時に、成田空港で日本円をユーロに換算した時、「それではあちらで不便にならないように、100ユーロ紙幣を避け、細かい紙幣で換金させていただきますね」と外貨交換所で親切に手渡された50ユーロですら不便を被ることがあるのかと思った。

それと同時に、この旅行客と言葉を交わした時に、彼にはどこか憎めないところがあったので、かさず救いの手を差し伸べた。

私:「細かいのがないんですか？だったら、この20ユーロ二枚と10ユーロ一枚と交換しますよ。」

旅行客らしき若い欧米人男性A:「どうもありがとう！助かったよ〜。」

旅行客らしき若い欧米人男性B:「兄ちゃん、どうもありがとう！」

私:「いえいえ、どういたしまして。」

このようなやりとりがなされた後、剥げかかったバスの表示が暗に示す杜撰さとは裏腹に、定刻よりも一分早くバスがリアーへ向けて出発した。乗客総員三名。私とこの二人の旅行客だけだ。

リアーまでの一時間の間、高速バスから見える景色を眺めていた。高い建物など一切なく、のどかな牧草地が果てしなく続く風景。時折現れる風車の大きさは、その風景の中において、ひときわ強い存在感を放っている。

リアーまでの景色の中で一つ忘れられないものがある。それは雲の合間を縫って地上に降り注ぐ黄金色の朝日であった。私はこの黄金色に輝く朝日をただただ眺めていた。一切の思考を介入させることなく。

しばらくこの朝日を眺めていると、一つのことにもふと気づいた。私はこのところ、自分が毎日生きているのだという強烈な実感と、それに伴う言葉では形容しがたい湧き上がる感情を感じるがよくあるのだ。

言葉では形容しがたいその感情は、一般的には「生の喜び」と言われるものなのかもしれない。しかし、どうも私には「生きることの喜び」という形をその感情に与えたくなかったのだ。この感情は間違い無く、「生きることの喜び」を包摂したものでありながらも、それ以上の何かなのだ。

ひとたびそれを「生の喜び」と呼んでしまうと、消え去ってしまう感情の機微がそこに渦巻いていることを感じていたのだ。その機微に対して、慎重に心の目を向けてみると、どうやらそれは「生きていることに対する侘び寂び」と表現しうるものなのではないか、と思ったのだ。

そうなのだ。これなのだ。生きることに対する破裂寸前の喜びの中に、侘び寂びがある感情なのだ。私はすかさずこの感情について日本語でノートにメモを取った。この欧州小旅行を通じて、私は旅の侘び寂びと同時に、生きることに対する侘び寂びも大いに感じることになるのだろう、と予感している。

黄金色の朝日を眺め、車内で鳴り渡っている洋楽ラジオ番組を聴きながら、そのような発見があったのだ。すると携帯に「ドイツへようこそ！」とドイツ語で書かれたメッセージが届く。それを受けて、私は自分がドイツという国に足を踏み入れたことを知った。

309. 欧州小旅行記: ハノーファーに向かって

早朝から色々あったが、無事にリアーについた。ドイツに足を踏み入れたのは、これが人生で初めてである。だが、街中の雰囲気はオランダと非常に似ており、まだオランダ語に習熟していない自分にとって、ドイツ語とオランダ語は一瞬見ただけでは区別がなかなかしにくいと思った。

今回の欧州小旅行は、電車の切符は全て事前にE-ticketの形で入手しておいたので、切符を買う手間が省けて非常に楽である。初めて訪れる駅では、迷う危険性や切符売り場で並ばされる可能性もあるため、事前にE-ticketを購入しておくことは、何が起こるか分からない旅の進行を速やかなものにしてくれる、と満足気な表情を一人で浮かべながらリアーの駅に入っていった。

だが、フローニンゲンでの欧州生活が始まってからの二週間の記憶が走馬灯のように蘇り、この満足気な表情は悲劇を引き起こしうるものである、と自分を戒め、武士の表情に切り替えてブレーメン行きの電車を待つことにした。

予定時間よりもだいぶ早くブレーメン行きの電車が到着し、すかさず電車に乗り込んだ。日本の電車とは違い、ドイツの電車もオランダの電車と同様に、席のスペースが広く、乗客も基本的に多くないため、立って乗車することはほとんどない。

昨年東京にいた時に、何回も満員電車に乗ることになってしまい、そうした状況をこちらの人はどのように受け止めるのだろうか、と気になっていた。ただし、こちらの電車は東京都内の電車のように、数分単位でやって来るようなものではなく、呑気な感じといえばそれまでだが、こちらで流れている時間感覚に忠実になれば、この運行間隔が妥当だろうと思う。

席に座りながらそのようなことをしばらく考えていると、電車が出発した。ブレーメンでスポーツの大会か何かあろうのだろうか。スポーツウェアを身にまとい、運動用具を背負っている小学生の団体と列車に乗り合わせた。車内の中で元気に騒いでいる小学生を見て、こうした姿は世界共通だなと微笑ましく思い、自分もそういう時代があったことを懐かしく思った。

「抽象的な記号の世界にまだ入ってはダメだ。この時期はこのように全身で騒ぎ散らさないといけないのだ。でなければ将来どこかで意識の発達が止まってしまう」と思っていると、車掌が切符を確認しにやって来た。

車掌が後ろ三人の切符を確認している気配を背中から感じ取ったところで、満足気な表情を浮かべながら、携帯のEvernoteのアプリにダウンロードしたE-ticketを素早く取り出そうとした。すると・・・「オフラインのためPDFファイルが開けません」という表示が目飛び込んできたのだ。

「そんな馬鹿な！オフラインでもこのあいだのケンブリッジでは開けたのに！Evernoteは英国びいきでドイツが憎いのか！」と一瞬焦ったが、フローニンゲンでの歩行禅がここに来て役に立ったのか、すぐに冷静になり、ダメ元でGmailをチェックしてみた。すると、オフラインでも添付のPDFファイルが開けることがわかり、なんとか車掌にE-ticketのバーコードを読み取ってもらえることができた。

ここから二つの仮説を立てた。一つ目の仮説は、Evernoteで最初に添付した地図のPDFがなぜオフラインでも開けていたかという、それはオンラインの時に、確認で一度開いていたからであり、オンラインの状態一度開いたファイルであれば、オフラインでも開けるのではないかと、ということだ。

二つ目の仮説は、満足気な表情はやはり悲劇しかもたらさないのではないかと、ということだ。しかしよくよく考えてみると、最終的にはいつも喜劇として全ての出来事が収斂するので、武士の表情ではなく、満足気な柔和な表情を浮かべておいた方がやはりいいのかもしれない、と思い直した。この仮説は実体験を伴わせながら、もう少し慎重に検証する必要があるだろう。

絶えず取るに足らない思念が沸き起こり、それと真面目に向き合っていると、あっという間に時間が過ぎ去り、ブレーメンに着いた。ここで今度はハノーファー行きの電車に乗り換える必要があったが、ここでは何もハプニングもなく、無事に乗り換えをし、ハノーファーに到着した。ここから最終目的地のライプチヒに向かう。

ライプチヒ行きの電車の乗り場をまず確認してから、時間に余裕があったので、ハノーファーの駅構内にあるスターバックスでコーヒーを購入することにした。大学時代の第二外国語でドイツ語を学んでいたにもかかわらず、朝昼晩の挨拶と自分の名前しかドイツ語で言えないことを知りながらも、店員との最初の挨拶だけはドイツ語で行い、注文からは英語にした。

今回の欧州小旅行で切符やホテルの手配をしたのは、出発の三日前からであり、オランダの自宅からオンライン上で諸々の手配をクレジットカードで行っていると、出発の二日目にクレジットカードが不正利用防止のため止められた。

その事実を知った時、すかさず国際電話でクレジットカード会社に連絡をし、出発の前日に再びカードが使えるようになったことを喜んだのを覚えている。以前紹介したように、フローニンゲン大学に留学するためには、大学側が指定した一年分の生活費の金額を、大学が管理する銀行に一旦預け—米国の大学に留学した時は、銀行の残高証明を提示すれば良かったのだが、オランダでは不可と—のことで、後日自分の銀行口座を開設したところでその金額が払い戻される、という面倒な仕組みがあるのだ。そのため、それまでの期間生きていくための資金をある程度現金で持ってきてはいたが、それでも現金はあまり使いたくなかったため、クレジットカードでコーヒーの支払いをしようとした。

クレジットカードをカード機に差し込み、応答を待つ私。カード機にカードを差し込んだ時の反応は、私の頭の中には二つしかなかった。一つには、日本でもお決まりのようにPINを打ち込むというものだ。たいてい、PINを打ち込むことを要求する時には「ピピッ」という音があるか、カード機に「PIN」という英語が表示される。

もう一つの反応は、「ピピ～」という音と共に、カードが使えないと表示される場合である。大きく分けるとこの二つのパターンしか、その時の私の頭の中には無かった。

私：(カード挿入後に静かな時間が少しばかり過ぎ去り、上記の二つのパターンの内どちらで来るかをただ待っていたが、静かな時間が気まずい時間変わったのを感じて・・・)「ねえ、これ何て書いてあるの？(英語)」

店員はコーヒーを入れに行ってしまったから、右隣で注文を待っている小学校高学年ぐらいの女の子に聞いてみた。

女の子：「ん？それPINよ(笑)。」

私：「えっ、これ“PIN”っていう意味のドイツ語だったの！どうもありがとう(笑)。」

記憶では“G”で始まる7文字ぐらいの、PINとは全く似つかぬいかついドイツ語の単語だったと思う。それにしても、オランダ同様に、ドイツも英語教育がしっかりなされていて驚かされるばかりだ。英語を速やかに聞き取り、すぐさま返答できる力がこの女の子には備わっていたのだ。自分が小学校の高学年だった頃を振り返ってみると、見ず知らずの外国人に対して、このような対応を英語で臆することなくできなかつたであろうと思われる。

そして、小学生の頃の私の辞書にはクレジットカードの利用に際する“PIN”という単語など無かつたため、二重の意味でこの女の子に関心をした。私はこのドイツ人の女の子に別れを告げ、フローニンゲンと同様に、夏とは思えぬ涼しさのハノーファーの駅でホットコーヒーを購入し、ライプチヒ行きの列車に乗り込んだ。

【追記】“PIN”を表すドイツ語“Geheimzahl”

310. 欧州小旅行記:ライプチヒに向かって

ハノーファーの駅でライプチヒ行きの列車に乗り込んでしばらくしたところで、幾つかの想念と不可思議な感覚が湧き上がってきた。最初に現れたのは、自分がこの世界の中にいるのか・世界が自分の中にあるのか、という考えと感覚だった。

というのも、ハノーファーの駅を列車が出発し、駅構内で購入したコーヒーを一口すすった瞬間に、車窓から見える移りゆく景色に触発されて、自分がハノーファーという街の中にいるのか、ハノーファーという街が自分の中にあるのかわからなくなってしまったのだ。

自分がこの世界にいて、目の前を過ぎ去っていく景色を眺めているのでは決してなく、世界が自分の内側にあり、目の前を過ぎ去っていく景色が自分の中で立ち現れていく、という感覚である。その時、この現実世界で現象として自分の内側に立ち現れるものは全て、自分に他ならないことを知った。

これを知った時、なぜだか自分の全てのものをこの世界と共有したいという想いが湧き上がってきたのだ。日々の生活の中で出会うものたち、自分の内側で生じる思考や感情などを含めて、文字どおり全てのものを世界と共有したいという想いである。より正確には、世界と自分とのつながりから生

まれた「自分」という全ての存在に対して、「共有」という名の下に、再度存在の光を当てたいという
想いなのだ。

このようなことを私は強く望んでいるのかもしれない。そのため、毎日文章を綴っていること
の深層部分には、こうした共有への想いがあるからに他ならないのではないかと、思ったのだ。

刻一刻と変化していく自分の心理とは裏腹に、ハノーファーからライプチヒに近づいてきても、景色
が一向に変わる気配がない。裏を返すと、景色が一向に変わることがないように見えるのは、実は
自分の心が変化していないからなのではないかと、思い直した。

今日の前に広がる景色は、牧歌的なドイツの田園風景と形容してもいいだろう。そうした風景の中、
遠くの方に中世あたりに建設されたと思われる立派な城が見えてきた。

私には建築物を見る眼というのが備わっておらず、建築物に関する知識が幾ばくかほどでもあれば、
遠方に見えるこの城に対する見方も随分変わるのだろう、と思った。そうした思いと同時に、幼少期
からの付き合いがある大工の親友の彼なら、こうしたヨーロッパの建物をどのように見るのだろうか？
という思いも現れた。

きっと彼なら自分には見えない視点からこれらの建築物を捉え、きっと自分とは違う感じ方をしてこ
れらの歴史ある建築物を眺めるのだろう、と思った。いずれにせよ、今の自分にできることは建築物
に関する知識を蓄えることはでは決してなく、自己を総動員した体験を通じて、建築物を見る眼を
養っていくことである。

そのようなことに思いを馳せていると、ハノーファーからの二時間半の列車の旅が終わり、ついにド
イツ中東部にあるライプチヒに到着した。このライプチヒという街で、私はある一つの大きな確信を得
ることになるとは、この時思ってもみなかったのである。

311.欧州小旅行記:シューマン博物館で訪れた「確信」

ライプチヒ駅に到着した時、ブレーメンやハノーファーの駅に比べて、ひととき巨大な空間がそこに広がっていることに驚いた。旧東ドイツの都市の中でも、最大のものの一つに数えられるこの街の存在感を感じさせられたのだ。

なぜだかわからないが、たくさんのプラットフォームと併設されている無数の店を見たときに、ライプチヒ駅には、少しばかりニューヨークのグランド・セントラル駅を思わせるものがあったのだ。そのようなことを思いながらあたりを見渡していると、列車を待つプラットフォームで別れの時を惜しんでいるカップルがいた。同時に、子供を笑顔で送り出す一組の両親の姿が目に入った。

別れを惜しむカップルには、悲哀だけではない感情がそこにあるはずであるし、子供を笑顔で送り出す両親には、激励だけではない感情がそこにあるはずだろう。そうした錯綜とする感情の中を、私たちは日々生きているのだ。

そうしたことを考えながら駅を後にし、ライプチヒの街に出てみると、そこにはこれまで訪れた世界のどの都市とも違う何かがあった。目の前に広がるライプチヒの都市空間に触れた時、まだ何も見えないにもかかわらず、この街に来たことは正しい選択だったと心の底から思ったのだ。

この街が醸し出す雰囲気と同様の重厚な感動を胸に、私は真っ先にロベルト・シューマンとクララ・シューマンの旧邸である「シューマン博物館」に向かった。博物館に到着すると、その真横に小学校が設立されていることに気づいた。校庭で無邪気に遊んでいる沢山の子供達を見て、私は温かい気持ちになった。

晴天に恵まれた涼しいライプチヒの風を感じながら、そして子供達が発する笑顔と清純なエネルギーをその場で感じながら、私はシューマン博物館の真ん前に立っていた。もうこの瞬間から自分の中でこみ上げてくる何かがあったのに気づいていた。

博物館とその音楽学校らしき建物はつながっており、楽器を持った小さな子供達が笑顔で私の目の前を駆けていく。その様子を見届けた私は、ロベルト・シューマンとクララ・シューマンが音楽活動に打ち込み、共に生活をしていた旧邸に足を踏み入れたのだった。

二階にある受付では、とても優しくそうな表情をした初老の女性が出迎えてくれた。どうも英語が達者ではないらしく、時折笑いながらドイツ語を交え、館内について簡単に説明してくれた。

受付の女性:「ここはシューマン夫妻が実際に生活していた場所です。館内には二人にまつわる資料がいくつも所蔵されています。」

私:「そうなんですね、どうもありがとうございます。」

受付の女性:「ほら、あそこにドアが開いているのが見えますか？あそこはシューマンが作曲活動に励んでいた仕事部屋なんです。」

私:「おお、それは是非ゆっくり見てみたいですね。」

受付の女性:「ええ、ごゆっくりしてってください。」

昼下がりのライプチヒの空から、シューマンの旧邸に淡い黄色の光が差し込んでいるのに気づいた。そこでは、「時が時ではない時のように」流れていた。

シューマン夫妻に関する多数の資料をじっくりと見ている最中、小さな、しかし芯の通った感動が、連続する波のように自分に押し寄せてくるのに気づいた。喜びを爆発させるような感動もあれば、静かに流れる感動もある。だが、どちらの感動にも共通して、感動の真髓のようなものがあるだろう。まさにそうした感動の真髓のみが、その時の自分の中で止めどなく生起していたのだ。

ロベルト・シューマンが執筆した手書きの楽譜やメモを見たとき、肉筆の持つ凄みを感じた。人工的に作られたガラスケースから飛び出ようとせんばかりに、シューマンの手によって書かれた楽譜やメモが、自分に大切なメッセージを伝えようとしているのがわかった。

その瞬間、私はこのところ薄々考えていた思いが、確信に変貌したことを知った。「やはりそうだったのだ。究極的に突き詰められた個は普遍に至るのだ」という揺るぎのない確信であった。個的なものを突き詰めた先に生み出される作品は、いつか必ず永遠の相の下に普遍性を帯びるのだ。これは紛れもない事実であり、一つの究極的な真理であると思った。

少なくともこの考えは今の自分にとって、絶対に譲ることのできない確固とした確信であるということがわかった。個が普遍に行き着くということこそが、もしかしたら構造的発達心理学で言うところの、「トランスパーソナル段階(自己超越段階)」の真髓なのではないかと思わされた。

受付の女性に言われた通り、私は望むだけの時間を使って、シューマン夫妻が生活をしていたこの空間の中に、ただ静かにいたのである。帰り際、この初老の女性と少し長めの談笑をして、私は揺るぎない確固たる確信と共に、シューマン博物館を後にしたのだった。

312. 欧州小旅行記:メンデルスゾーンの虹色の音楽を浴びて

昨日のライプチヒでの体験は、非常に密なものであり、正直なところ、昨夜の睡眠を経てどれだけその体験が消化されているのかを、目覚めと共に確かめる必要があった。シューマン博物館で獲得したあの「確信」が、自分の中の一本の筋として存在していることを無事に確認して、ライプチヒでの二日目を開始することができた。

今日の午前中はまず最初に、メンデルスゾーン博物館に足を運んだ。思えば、メンデルスゾーンの楽曲は確かに私のiTunesに存在しているが、その数は多くないことに気づいた。そのため、メンデルスゾーンがどういった音楽家であり、どのような色を持った楽曲を創造したのかについて、ほとんど知らずにこの博物館に足を運んだのだ。

博物館に足を入れた瞬間に気づいたが、昨日訪れたシューマン博物館よりもモダンであり、二つの博物館には違った味わいがそれぞれある。シューマン博物館では、シューマン自身が残した楽曲が聴けるような設備はなかったが、メンデルスゾーン博物館では、メンデルスゾーン自身が残した楽曲を聴けるような設備が充実していた。

タブレットが複数台置かれている「楽曲試聴室」のようなものがあり、その部屋に飾られている抽象画を見ながら、メンデルスゾーンの幾つかの曲を聴いた時、この二枚の抽象画が描き出す絵画世界とメンデルスゾーンが創出した音楽世界がほぼ完全に合致していることがわかった。

博物館の資料を見ることによって初めて、メンデルスゾーンが画家としても優れた才能を発揮していたことを知った。メンデルスゾーンは、欧州各国を音楽修行や演奏旅行をするたびに、印象に残った風景をスケッチし、絵画作品として残していたのだ。

なるほど、「音色」という日本語は実に絶妙な言葉であり、メンデルスゾーンは絵画に関しても優れた才能を持っていたからこそ、彼の楽曲に先ほどの抽象画のような色彩を感じることができたのか、と納得した。

一つメンデルスゾーンから改めて教えられたことがある。それは何かというと、過去の偉大な創造者が生み出した型を、まずは徹底的に模倣することから始める意義である。メンデルスゾーンは、確かに幼少の頃からその才能を遺憾なく発揮していたようだが、その才能に己を単に委ねるのではなく、バッハ、ベートーヴェン、モーツァルトなどの先駆者たちの音楽から学べることを全て学ぼうとするような実践を行っていたことが伺えたのだ。

やはり偉大な人物を師匠として選び、彼らが築き上げた型をまずは徹底的に模倣することによって初めて、新しい偉大なものを創造することができるのではないか、と思わされたのだ。また、模倣すべき対象は、偉大な人物に限定しなければ、不純物のようなものが混入してしまう恐れがあるとも思った。

あえて身も蓋もない言い方をすると、偉大な才能は偉大な才能からしか真の意味で学ばないのではないか、と強く思った。「偉大な才能は全ての人から等しく多くのことを学ぶ」という言葉は聞こえはいいが、この言葉はどうも、偉大な才能が築き上げた高度な世界観から、何も汲み取ることができない凡人の慰め言葉のように聞こえ始めたのだ。

そのため、私たちは重要なことを真の意味で学ぶためには、極めて卓越した人物だけを慎重に選び、その人物から可能な限り多くのことを学ぶように注力した方がいいのだ、と思った。残念ながら、私たちには全ての人から等しく学べるほどの時間も資源もないのである。このようなことを、メンデルスゾーンは私に突きつけてくれたのだ。

そのようなことを考えながら、私は博物館の全ての部屋をじっくりと見て回った。博物館の二階から一階に降り、博物館をいざ後にしようとしていたところ、一階のある部屋にだけ入っていないことに気づいたのだ。その部屋は“Effectorium”と命名されていた。

この部屋は、最新の音楽テクノロジーを活用し、小さな部屋全体がさながらデジタル・コンサートホールようになっていた。しかもそこでは、聴衆としての体験ができるのみならず、なんと指揮者としての体験ができるのだ。

目の前にある大型のタブレットのようなものに楽譜が現れ、その後ろにある複数のデジタル支柱が管弦楽団となり、指揮者としてメンデルスゾーンの曲を楽しむことができるのだ。私は楽器を演奏する訓練を受けたことはないし、ましてや指揮者などもつてのほかであったため、「指揮者モード」を解除して、ただ純粹にメンデルスゾーンの管弦楽曲に耳を傾けていた。

ここではもう・・・素晴らしい音楽が背筋を通り抜ける「あの感覚」が、何度も何度も連続して訪れたのだ。その度に私は昇天しそうになり、感動のあまりにこみ上げる涙を抑えるのに必死だった。

私にできたことは一つしかなく、そこで流れていた“A Midsummer Night’s Dream”をただただ繰り返して再生することだけだった。最初にこの部屋に入った時には、何人かの人がいたが、気づけば私以外の人は誰もいなくなっていた。

何回繰り返し聴いたのかわからないが、何度目かの曲の途中で、一人の年配の白人女性が部屋に入ってきたのが視界に入った。私はデジタルの譜面台の前に立って、デジタル管弦楽団の一挙手一投足をずっと眺めていた。曲が終わった時、私は思わず拍手をし、その女性に声をかけた。

(拍手)私:「素晴らしいですね。もう一度聴きますか？」

年配の白人女性:「ええ、お願い出来るかしら。」

この女性はとても品の良い感じであり、優しい笑顔を浮かべながらそのように答えた。先ほどからずっとこの曲を独り占めしていたのに、なぜだか他人とこの素晴らしい曲を共有できることの方が、遥かに嬉しいことに気づいたのだ。

もう一度この曲を再生している最中、私の世界の中からその女性は完全に消え、私は“A Midsummer Night’s Dream”の世界にまた没入していった。隣にこの女性がいるにもかかわらず、私は静かに涙を流していたのだと思う。

曲が終わると、私は再び拍手をした。

(拍手)私:「やっぱり…、やっぱりこの曲は素晴らしいですよ。そう思いませんか？」

年配の白人女性:「ええ、本当にそうね。感動を誘う曲よね。」

私:「本当にそうですね。(譜面台を見ながら)ええっと、この曲は“A Midsummer Night’s Dream”という名前らしいですよ。」

年配の白人女性:「はは、知ってるわ(笑)」

私:「えっ、もしかして音楽家の方ですか？」

年配の白人女性:「ええ、実はチェリストなの。」

私:「おお、チェリストですか！どおりで。どれくらいチェロを演奏されているのですか？」

年配の白人女性:「さあ、もう何十年にもなるわね(笑)。そうだわ、ちょっと一緒にこの曲をより深く味わってみるのはどうかしら？」

私:「ええ、是非。」

そこから親切にもこの女性が、デジタル譜面を見ながらこの楽曲についてあれこれ解説してくれたのだ。

年配の白人女性:「この曲を“modern instruments”モードで再生した時と“historical instruments”モードで再生したの時の音の違いが分かったかしら？」

私:「いえ・・・音楽に関して僕は素人なもので(苦笑)」

年配の白人女性:「音楽を愛しているという点において、あなたと私は何も変わらないわ。ほら、もう一度第一楽章の部分だけ聴いてみましょう。きっとその違いが分かるはずよ。」

こうして私は、この女性から有り難いことに音楽の手ほどきを受け、両者の音の違いのみならず、クラシック音楽というものが、世界共通の普遍的なものなのだということを教えてもらったような気がした。

その女性が別れの言葉と共にこの部屋を去った後、私は最後にもう一度、この虹色に輝く曲を全身で浴びたいと思った。何度聴いてもこの曲は、私の背筋を突き抜け、形而上的世界で七色の虹を描き出しているように思えた。

“A Midsummer Night’s Dream”というこの曲のタイトルが、日本語で『夏の夜の夢』であることを後で初めて知った。ライプチヒという街で、メンデルスゾーンがこの曲と共に過ごした今日という夏の日を、私は一生忘れることはないだろう。

313. 欧州小旅行記: バッハ博物館を訪れて

ライプチヒの二日目の午後に訪れたのは、バッハ博物館である。バッハ博物館について紹介する前に、ライプチヒが本当に「音楽の街」と形容されるにふさわしい特徴を一つだけ紹介したい。

実は昨日のシューマン博物館を訪れた際に、受付の女性から一枚の薄いパンフレットを頂いていた。そこには“Leipzig Music Trail”と書かれており、ライプチヒの街には「音楽の道」なるものがあるそうなのだ。文字通り、道にバイオリンの弦のような形をしたオブジェが埋め込まれており、それが進む方向を示してくれる矢印のような役割を果たしているのだ。

事前調査によって、ライプチヒの街はバッハ、メンデルスゾーン、シューマンという三人の代表的な音楽家が活躍した場所だという知識を取り入れていたが、音楽の道には23箇所のポイント地点があり、それら三人以外にも、様々な音楽家が活躍していた土地であることを教えてくれる。

23箇所のポイントを全て巡ったあとに、バッハが音楽監督を務めていた聖トーマス教会にまず立ち寄った。息を飲むステンドグラスと壮大なパイプオルガンが存在するこの教会で、今から300年近く前に、ヨハン・セバスティアン・バッハという偉大な音楽家が、この場所で音楽を奏でていたことを思うと、どこか感慨深いものがある。

その余韻に浸りながら、聖トーマス教会の横にあるバッハ博物館に足を運んだ。おそらく、このバッハ博物館が設備の観点と所蔵資料の観点からすると、この街の音楽博物館の中で一番優れたものなのだろう。事実、300年近く前にバッハが手書きで残したいくつもの楽譜を含めて、貴重な資料が多数所蔵されており、資料解説のオーディオプログラムも非常に充実していた。

しかし正直なところ、メンデルスゾーンやシューマンと比べてバッハが自分にとって一番身近な存在だと思っていたのだが、決してそうではないことを痛感させられたのだ。というのも、バッハの音楽世界が今の自分の世界観を遥かに凌駕するものだったからだろうか、先に訪れた二つの博物館に比べて、こみ上げてくるような大きな感動はほとんどなかったのである。

バッハという音楽家は、私の想像を遥かに超えた次元にいるのかもしれない。バッハが毎週少なくとも一つの曲を作曲することによって、美の体系的な創出法則を発見し、超越的な音楽世界に辿り着いたように、私も絶えずこの世界に何かを生み出すような創作活動に従事していかなければならない、と思った。

博物館で得られたのは、どこか重々しく、濃密な塊のようなものが私の全身に纏わりつくような感覚であった。これはバッハが私に授けてくれた課題なのかもしれない。この課題をオランダに持ち帰り、今こうして感じている重厚かつ濃密な塊の正体を突き止め、時間をかけてこの感覚を消化していく必要があるだろう。

ライプチヒという歴史ある街は、気持ちの良い感覚のままでは私を帰してくれなかったのだ。バッハから与えてもらった課題を抱え、明日からシュツットガルトに滞在する。

314. 欧州小旅行記:CNNのニュースより「進化しない人類」と「人間に還ること」

ライプチヒを出発し、今日からシュツットガルトに滞在する。ライプチヒのホテルで朝食をとっている時に、CNNのニュースが放送されていた。

現在、欧州各国を小旅行中であるが、欧州の実態としてテロを含めて、様々な騒動が勃発しているというのが現実である。こうしたニュースを見るにつけ、「人類は着実に進化している」という言説は虚言だと思わされる。

そして、構造的発達心理学を学んだ者が掲げがちな「人類の意識の進化に寄与する」というスローガンも相当に安直なものであり、戯言にすぎないのではないかと思わされるのだ。もちろん、過去の偉大な発達心理学者や哲学者が述べるように、数百年のスケールで人類の集合的な意識段階を観察してみると、確かに構造的な発達がみられるのは間違いないだろう。

しかし、それは数百年という長大なスケールで見た話であり、なおかつ発達段階の進化の度合いというのも、実はそれほど大きくないのである。さらに、私たちは発達段階を飛ばすことはできず、必ず発達段階0から進化の歩みを始めなければならない、という根本原則も忘れてはならないだろう。

つまり、今後仮に人類の集合的な意識段階がどれほど高度になろうとも、現在の欧州で頻発しているテロを起こすような意識段階を持った人間が必ずその世界にも存在し続けるということだ。さらには、意識段階が高度化したことに伴い、テクノロジーを駆使したテロのように、その質もより高度化されることが十分に考えられるのである。

そうしたことを考えると、「人類は着実に進化している」という言説や、「人類の意識の進化に寄与する」というスローガンを掲げる人たちを見ると、彼らの善意さは十分承知なのだが、その純朴さにも唾然としてしまう自分がいるのだ。

これは完全に本能的な感覚なのだが、日本にいるときには自分の身に降りかかってくるであろう危機に対する意識が極めて希薄なのだ。危機意識を喚起するような空気が日本に希薄であるからこそ、一時帰国して母国の大地を踏んだ時、言葉にならない安心感が得られるのかもしれないが、そ

れにしても、外側に存在する確かな脅威を傍観するような空気を醸成している日本の集合意識は、正気の沙汰ではないのではないかと、欧州に来てから特に痛感している。

自分の防衛本能の度合いを観察してみると、日本にいたときに極端に低く、オランダで生活を始めてから少しばかりその度合いが高まっているのを感じるが、それでも強いストレスを感じるほどのものではない。今この瞬間に、単なる観光客としてドイツを訪問している自分の感覚に焦点を当てると、その防衛本能はなぜだがとても高くなっているのだ。

ライプチヒで訪れた様々な音楽家の博物館から得られた無数の感動や、列車から眺めるドイツの牧歌的な風景の裏で、私は常に防衛本能を極度に高めているような状況なのだ。国外で生活をする時にいつも思うのは、異国の地で生活をして初めて「人間に還った」という感覚が起こるのだ。

逆に言うと、日本で生活をしている時の私は、どうも人間が本来備えておくべき大切な何かを欠落させているのではないかと、思わされるのだ。現在進行中の欧州小旅行のみならず、これから数年間、まずはオランダという異国の地で生活することによって、人間の振りをした人間ではない日本人の私から脱却し、原初の人間の姿に戻ろうと思う。何はともあれ、そこから始めなければならぬ。

315. 欧州小旅行記:シュツットガルトへ向けて「豊かな知性を育む環境」

ライプチヒのホテルでゆっくりと朝食を取った後、午前八時前の列車に乗り込み、シュツットガルトへ向かった。ライプチヒからシュツットガルトまでは、乗り換えを含めて約五時間ぐらいの列車の旅となる。

今回の欧州小旅行で飛行機を使わず、列車にしたのは大正解であったと思う。自分の身体と精神の耐久度合いを見ると、一日に五時間から八時間ぐらいの列車移動であれば全く問題ないことがわかった。逆にこれぐらいの時間をかけながら移動することによってしか得られない、旅の醍醐味のようなものがあるのを実感している。

とはいえ、見えないところでの疲弊があったのだろうか、最初の乗り換え地点までの列車の中で、急に睡魔が襲ってきたのだ。ライプチヒでより親近感を持つに至ったシューマンには申し訳ないが、

疲れというよりも、車内で聞いていた彼のピアノ曲があまりにも心地の良い音色を奏でていたため、睡魔が襲ってきたのだらうと解釈していた。

とりあえず、一時間ぐらいシューマンのピアノ曲をかけながら仮眠を取った。その後、強い太陽光が閉じられていた瞼にぶつかったのを受けて目を覚ました。目を覚ましてみると、一点の雲もない晴れ渡るドイツの空が眼前に広がっていた。

自分が現在シュツットガルトへ向かっていることを十分承知しており、今この瞬間にドイツにいるのだとわかっていながらも、目の前に広がっている景色が、自分の想像上のスイスの山岳風景と重なって見えたのだ。「自分は今スイスにいるのだろうか？」そんな錯覚を催すような景色だったのだ。

この景色に合わせ、シューマンのピアノ曲からモーツァルトの軽快な交響曲に切り替えたところ、自分の意識が活動にふさわしい状態になっていくのが分かった。それにしても、フローニンゲンからライプチヒに行くまでの景色といい、ライプチヒからシュツットガルトへ行くまでの景色といい、実にのどかな景色が広がっていることに驚かされる。

日本の新幹線のようなものに乗って現在移動しているのであるが、日本の新幹線から見える景色ではいくらのどかな場所であっても、大抵は人が住んでいる家がちらほら目に入るのである。しかし、ドイツの列車から見える景色には、人が住んでいないような空間が頻繁に目に入ってくるのである。

やはり日本は人口も多く、国土の面積がそれほど大きくはないため、人口密度が高いのだらうと思わされる。カントにせよヘーゲルにせよ、ドイツは偉大な哲学者を非常に多く輩出しているが、こんなどかな生活空間からよくあれだけ緻密な思考ができるな、と思わされる。逆にどかな生活空間だからこそ、そうした思考が可能になるのかもしれないな、とも思わされたのだ。

そのようなことを思った時、あえて日本語訳をするならば、「環境的豊潤知性」というよく分からない言葉が私の頭の中に浮かび上がってきた。これは米国や欧州で生活をしてきた中で痛いほど感じているのであるが、私たちの知性は置かれている環境と絶えず相互作用をしながら発揮されるという特性を帯びているため、自分が置かれている環境が直接的に自らの思考運動に大きな影響を及ぼすのである。

極論すると、その環境にいることによってしか発揮できない思考というものが存在しているのである。欧州での生活を始めてからの自分の日記を読み返してみると、「これは日本の生活環境の中では、決して発揮されえない類の思考運動に自分は従事させられているな」とたびたび思われるのだ。

私たちを取り巻く環境というのは、文字通り「生態系」として表現されるものであり、私たちの知性もまた生態系なのだ。思うに、知性という生態系は、環境という生態系を本来超え出て行くようなものではなく、知性圏 (noosphere) は環境圏 (biosphere) に包摂される形で存在しており、環境圏が崩れた瞬間に知性圏は崩れ去る、というホロン構造の特質は実に的を得たものだと思うされる。

そうしたことを考えると、豊かな知性を育てていくためには、そもそもその知性が属する環境がどれほど豊饒なものかが鍵を握ると思うのだ。もちろん、ここで言っている環境というのは、物理的な環境のみならず、その環境に埋め込まれている歴史や精神風土なども含まれる。

知性と環境の関係性については、今後より一層自分の経験を通じて考えていかなければならないと思った。そのようなことを考えていると、いつの間にやら、ヘーゲルという極めて優れた知性を持った人間を輩出したシュツットガルトという街が近づいてきた。

316. 欧州小旅行記: ヘーゲル博物館を訪れて

列車が最終停車駅のシュツットガルトへ近くづくにつれ、ライプチヒと比べて気温が高くなってきていることに気づいた。その変化に気づいたとき、自分が欧州をだいぶ南に下ってきたことを知った。

地図を確認すると、現在地はパリと同じぐらいの緯度であり、数日後に訪れるパリもこのぐらいの気候なのかもしれないと想像する。シュツットガルトの気温がこれまで訪れた欧州の土地よりも高くなっているとはいえ、最高気温は25°Cぐらいだ。

シュツットガルトに到着後、上着を脱ぎ、半袖になって観光を始めた。まずは駅から徒歩15分ほどのところにある宿泊先のホテルへ向かうため、メイン通りの一つである“Königstraße”をひたすら直進した。

この通りを歩きながら思ったのは、シュツットガルトの街も随分と観光地化されている、ということである。主要都市のショッピング街であれば、どこにでもあるような店が乱立しており、これらを眺めながら歩いている段階では、まだシュツットガルトらしさというものがあまり感じられなかった。

しかし、通りをしばらく進んだ後に視界に飛び込んできた湧き出る泉のある広大な広場は、シュツットガルトを訪れた観光客を癒す憩いの場としての役割を見事に果たしていると感じさせられた。ここは「シュロス広場」と呼ばれており、先ほどの店が乱立する空間とは異質のものを感じたため、これはシュツットガルトという土地が創出する固有の何かを持った場所であるとわかった。

そして圧巻だったのは、シュロス広場の奥にたたずむ「新宮殿」と呼ばれるバロック式の建造物であった。遠目から見ても、この宮殿が醸し出す存在感が際立っており、ゆっくりと近寄ってみることにした。

宮殿全体が一つの美を体現していたのはもちろんなのであるが、私が注目していた箇所は別にあった。それは宮殿を見上げた時に見えた、屋根の上に取り付けられていたいくつもの彫刻であった。

一つ一つ顔も形も違う彫刻を見て、いったい誰がどのような思いでこれを創作したのかが気になっていたのだ。ほぼ直感的に、この宮殿全体の美を支えるためには、これらの彫刻が不可欠であることが分かった。

私たちはとりわけ過去の偉大な表現者のみに注目しがちだが、名もない表現者たちの努力と功績を決して忘れてはならないのではないだろうか。ライブチヒで偉大な音楽家たちの博物館を巡る最中、多くの人にとっては名前も知らないような無数の音楽家たちが、それらの偉大な音楽家の影に存在していたことを知らされた。

そして、偉大な音楽家たちは、それらの無名の音楽家たちとの交流を通じて多大な影響を受け、現在に残る偉大な作品を輩出していったことを知った。決して偉大な人物や偉大な作品のみを見てはならない。その人物や作品の奥の奥にある真実を見なければならぬ。そんなことを思ったのだ。

シュロス広場にある新宮殿にそのようなことを考えさせられ、ホテルのチェックインを済ませて、ヘーゲル博物館へ向かった。

ホテルから徒歩数分のところにあるこの博物館は、入場料が無料であり、哲学者ヘーゲルにまつわる貴重な資料を見ることができる。

先ほどの感覚がそっくりそのまま残っていたため、ヘーゲルに関する資料を眺めながら、ヘーゲルを取り巻いていた人たちや時代について思いを巡らせていた。間違いなくヘーゲルの友人であった哲学者のシェリングや詩人のヘルダーリンは、ヘーゲルの哲学思想に多大な影響を与えている。

しかしながら、それだけでヘーゲルの哲学体系が生み出されたとは到底考えられず、彼の思想を育むことに貢献した名もない人たちや取り巻く環境について、より多くのことを知りたいと思わされた。そのような思いと共に博物館から外に出た時、このシュツットガルトという街から哲学者ヘーゲルが生み出された秘密を、自分はまだ全く掴んでいないと分かった。

偉大な知性を育む場の特徴というテーマは、これからの自分の重要な探究テーマになりそうである。

317. 欧州小旅行記: 景観美を体現した街、スイスのニューシャテルへ向かって

本日のシュツットガルトは晴天であった。早朝八時前の肌寒い気温の中、ホテルを出発してみると、昨日とは違った顔のシュツットガルトを見ることができた。

昨日の日中は、街中に観光客が溢れ、少しばかり落ち着かないような雰囲気醸し出していたシュツットガルトの街も、早朝のこの時間であれば観光客はほとんどおらず、とても静かである。眩しく輝く朝日を浴びながら、シュロス広場で少しばかり立ち止まり、新宮殿を眺めていた。

どの時間帯にどのような気持ちでその場にいるかによって、その場から感じられるものがこれほど異なるものなのだ、と改めて認識した。昨日とは異なる印象を与えてくれた新宮殿に挨拶をし、私はシュツットガルト中央駅へ向かった。

シュツットガルト中央駅へ着くとすぐに、新鮮なフルーツの盛り合わせ、アボカドサンドイッチ、コーヒーを購入し、列車へ乗り込んだ。いよいよニューシャテルへ向かう時がやってきたのだ。スイスのこの街は、発達心理学に多大な貢献を残したジャン・ピアジェの生誕地である。

私は兎にも角にも、自分の探究領域である発達科学の礎を築き上げたピアジェが生まれたこの土地を、自分の目で見てみたいと強く思っていた。人口わずか三万人のこの小さな街を知る人はそれほど多くないかもしれないが、私はこの街を実際に訪れることによって、自分の中にいるピアジェをより確固とした存在にしたかったのだ。

ピアジェは早熟にも13歳の時に軟体動物に関する論文を発表し、ニューシャテルの博物館の館長に推薦されたが、ピアジェがわずか13歳であったことから、館長になることはできなかった、というエピソードは非常に有名である。ピアジェがこの時の論文を執筆するために軟体動物を捕まえたニューシャテル湖を近くで実際に見てみたい、そんな思いが以前から沸々と湧いていたのだ。

後五時間ほどでその念願が叶うのだと思うと、気分が多いに高揚してくる。シュツットガルトからニューシャテルへ行くには、まずカールスルーエという比較的規模の大きい工業都市で乗り換えをする必要がある。そこから今度はスイスのオルテンで乗り換えをすれば、ニューシャテルへ着くことができる。

ライピヒで聞いたメンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』の印象があまりに強く自分の内側に残っており、結局、シュツットガルトからニューシャテルまでの約五時間の間、ずっとこの曲を繰り返し再生していた。音楽というのは書物と同じように、繰り返し触れれば触れるほど、そしてその接触が真剣であればあるほど、新たな経験を私たちにもたらしてくれる不思議な力を持っている、と改めて思わされた。

興味深いことに、約12分間のこの曲を20回ぐらい繰り返し聴いていた頃だったのだろうか、急に曲に対する印象が変わったように感じたのだ。より正確には、曲が開示してくれる音楽世界の階層に変化が生じたのを掴んだのだ。

その変化の触媒を果たしたのが、実はカールスルーエからオルテンの途中で停車したスイスのバーゼルという駅だったのだと思う。この駅に着くや否や、携帯の案内メッセージが届き、ドイツからスイスという新たな国に足を踏み入れたことを知った。

実際のところ、携帯のメッセージを受け取る前から、自分がドイツとは質的に異なる雰囲気を持つ空間に近づいていることを察知していた。私の肉体の目に映る風景が、徐々に違ったものになっていたのを感じていたし、心の目に映る心象風景も異なるものに変化しているのを感じていたのだ。

ドイツからスイスへの身体的・精神的な移行に足並みを揃える形で、メンデルスゾーンの曲が変化するというのはとても不思議な現象であった。

スイスを訪れたのは今回が初めてであるが、車窓から見える景色は、良かれ悪しかれ自分がイメージしていたものと非常に近かった。ただし、一つだけ歴然として異なっていたことがあった。それは、前々から抱いていたスイスに対する私のイメージが自分の内側に喚起する感情と、実際にスイスという国を訪れることによって、全身でそのイメージを捉えた時に湧き上がってきた感情は全く別種のものだったのだ。

全身からじわじわと込み上げてくる感情は、どこかフローニンゲンからリアーに向かっていた時に湧き上がってきた、「生きることに對する侘び寂び」に近いものがあった。

そして、バーゼルからオルテンに到着し、最後の乗り換えを行った。乗車した列車はスイスの国鉄なのだろうか、ドイツで乗っていた電車とはまた種類が異なり、座席のスペースがほぼ全て四人掛けの広々としたものになった。

ただし、乗客はそれほど多くなかったので、四人掛けの座席を大抵どの人も一人で使っている。私も一人で腰掛け、その後は、車窓から見える景色に釘付けになっていた。数十分後、列車がトンネルに入った。

暗いトンネルを抜けると、そこは光り輝く広大な湖であった。この湖こそ、ジャン・ピアジェを育てたニューシャテル湖だ。スイス最大のこの湖は、雲の合間から差し込む太陽光を反射して、湖面を輝

かせていた。その湖面の輝きは、まるで、私たち列車の乗客を大いに歓迎してくれているかのようであった。

ニューシャテル湖からの思いがけないお出迎えと共に、湖を取り囲む雄大な山々が生み出す景観美に息を呑み、私はついにニューシャテルという街に降り立った。駅から出た瞬間、これまでの人生で訪れた世界中のどの街とも違う空間が、今自分の目の前に広がっていることを即座に感じたのだ。

318. 欧州小旅行記: 早朝のニューシャテル湖を眺めて

これまでの旅を通じて見えないところで蓄積していた疲労を取るために、昨夜はいつもより幾分か早く就寝した。さらに起床時間も少し遅くし、睡眠時間を多く確保できたため、昨日までの疲労がほぼ消えたように思う。

ホテルの自室のカーテンを開けたところ、ちょうど朝日が出てくる場所であった。いつもであれば、部屋から朝日を眺めるだけで終わりにするところだが、今朝はそれだけで終わりにしたくなかったのだ。

「ニューシャテルの湖畔でこの朝日を眺めたい」という衝動的な気持ちに突き動かされ、パジャマ姿のままニューシャテル湖へ向かった。ホテルからニューシャテル湖までは目と鼻の先なのだが、なぜだかホテルを出た時に、数メートルほど小走りで湖畔に向かおうとしていた。

白銀と黄色を組み合わせたような朝日が湖面を照らしている。朝日と同じ色の一本の線が湖面を走っている。対岸は霧で覆われており、上空では飛行機雲が交差している。その飛行機雲をなぞるかのように、鳥たちが大空を舞っている。

静寂な早朝の時間にこうした美しい景色を眺めていると、自分の意識がどんどんと下へ下へ、深くへ深くへと動いていくのがわかった。ここで気づいたのは、それは意識の上昇現象ではなく、それは意識の下降現象と表現していいかのような感覚だったのだ。

意識の発達理論において、大いなる自然を眺めた時に喚起される意識状態というのは、高次元のものだとされる。つまり、本来は意識が上へ上がるという現象のはずなのだ。

だが、今の私にとってみると、自然の美に触れた時に喚起される意識状態というのは、下への運動なのだ。記憶を遡ってみると、サンフランシスコ在住時代に、ヨセミテ国立公園に二度ほど行く機会があった。

どちらの時も共に、あの圧倒的な大自然の景観美を目の当たりにした時に、自分の意識が一気に上昇するのを感じていたのだ。しかし、今は真逆の感覚を感じるのだ。自分の外へ外へと意識が無限に拡張するかのような感覚ではなく、自分の内へ内へと無限に収縮していくかのような感覚があるのだ。

こうした感覚の変化に気づいた時、この数年の間において、自分の内側で何かしらの大きな変化があったことを知った。

さらに、自分はもしかしたら、偉大な芸術家が創出した絵画や建造物よりも、人知を超えた働きによって形作られた自然の方に心を打たれるのではないか、という気づきも得たのだ。果たしてこの気づきがどれほど正しいものなのかは、数日後に訪れる予定のルーヴル美術館で確認したいと思う。

いずれにせよ、より重要な気づきだったのは最初の点である。私たちはとにかく意識の上昇過程ばかりに目が行きがちであり、往々にしてその実践も意識の上昇を目指したものとなりがちである。しかしながら、私たちの意識の進化において、上昇の道のみならず、下降の道も等しく重要なものであることを忘れてはならないのだ。

私たちは空の彼方のみならず大宇宙があると錯覚しがちだが、地の彼方にも大宇宙があるのだ。両者の大宇宙、すなわち二つの天は一つのものとしてつながっているが、片方の道だけでは辿り着けない境地があるようなのだ。

上昇のみを希求するのではなく、下降にも等しく注意を払うこと。そして、地に足をつけて生きること。ニューシャテル湖の景観美からそのようなことを再度教えてもらったように思う。

319. 欧州小旅行記:フリードリヒ・デュレンマット美術館を訪れて

早朝のニューシャテル湖の散歩からホテルへ戻り、ゆっくりと朝食をとった。朝食を食べながら、スイスの物価についてあれこれ考えを巡らせていた。

普段の生活における朝食では果物しか取らず、一日に三食食べるのだが、基本的に旅行中は朝食を多めにとり、昼食を食べずに夕食と合わせて二食だけ取るようにしている。旅行中はあれこれ動き回りたいという考えがあるので、二食だけで旅を進めていくのは、自分にとって理にかなっている。

昨日の夕食は現地のスーパーで調達した。スイスでもユーロが使えると思い込んでいたが、スイスがEU加盟国ではないということをすっかりと忘れていた。つまり、この国では基本的にユーロでの支払いを受け付けておらず、現地通貨のスイスフランのみが使えるのだ。

もちろんクレジットカードで支払うことができれば、現地通貨のスイスフランを用意する必要はないのだが、思わぬところに意外な落とし穴があった。そのスーパーであれこれ食料品を見ていたの時、基本的にスイスの食料品の価格は高いと感じた。

水の価格はオランダと比べても遜色はないが、食べ物に関しては、二倍ほど割高であることがわかった。美術館や博物館の入場料や交通機関の費用などは、オランダと比べてもそれほど変わりはないため、食べ物の価格だけ高いことが不思議である。

想定される理由についてあれこれ考えながらホテルを後にし、本日はスイス人の小説家かつ画家のフリードリヒ・デュレンマット(1921-1990)の美術館を訪れた。ニューシャテルを訪れるまで、私はこの人物の仕事について知らなかった。昨日、ニューシャテルにある美術館や博物館を検索していた時に、偶然この美術館を見つけたため、今日の午前中に訪れようと思ったのだ。

デュレンマットの美術館は、ニューシャテル駅の裏手にある小高い山の上にある。実際のところ、この美術館は、デュレンマット本人の自宅の跡地に建築家のマリオ・ボッタが建設したものだそうだ。この美術館を訪れることによって、あれこれと過去の経験が紐付いていった。一つには、サンフラン

シスコ時代に訪れた「サンフランシスコ近代美術館 (SFMOMA)」もなんと、マリオ・ボッタが手がけた建物だったのだ。

それゆえに、デュレンマットの美術館に到着した時、どこか面影のある建築物だと感じていた理由がわかったのだ。

ニューシャテル湖を見下ろす山の上に突如として現代的な建物が現れた時には驚いたが、ボッタの建築作品が優れているのは、周りの景観を損なうことをせずに、建物と周りの環境を調和させることにあると思った。

美術館の館内もニューシャテル湖の水と同じくらい透明感があり、作品を堪能するために心地よい空間を提供してくれていた。美術館の開館とほぼ同時に入場したためか、私一人しか訪問者がおらず、展示されている作品を独り占めしているような気分であった。

デュレンマットの作品を見ていて気付いたのは、彼が人間心理の闇の奥深くにまで踏み込んで、作品を描いているということだった。極めてシュールでグロテスクな絵画作品が多いのだが、それらの全てが、人間心理の暗黒面をこれ以上ないぐらいに的確に掴んでいることに気づく。

一般的に、美しい風景画や人間心理の光の側面を描いた作品を鑑賞する時、精神の浄化作用のようなものが、私たちの内部に引き起こされるだろう。しかしそれとは逆に、人間心理の闇の側面を描いた作品を鑑賞した時にも、別種の精神的な浄化が引き起こされるのだということを私は感じた。

以前どこかの記事で書いたが、基本的に私たちは、自分の攻撃性や闇の側面を抑圧しながら生きているのだ。特に現代社会では、それらが過剰に抑圧されている状況にあるため、デュレンマットのような芸術作品は、それらの抑圧感情の安全弁のような役割を果たしうると思われたのだ。

多数の暗黒的・破滅的な作品が多い中、私を取り憑かれたようにずっと鑑賞していたのは“Black Ascension”という作品である。その他にも立ち止まって細部まで鑑賞するような作品が数多くあったが、この作品だけは格別であった。

しかし、今の私には、なぜこの作品に自分が取り憑かれたように見入っていたのかわからない。また、カフェでコーヒーを飲んだ後にもう一度この作品を見てから帰らなければならない、と思った理由も定かではない。ライプチヒでのバッハ博物館しかり、この作品を自分の内側から適切に理解するには、これから多くの時間がかかりそうだと思うされたのだった。

320. 欧州小旅行記:ニューシャテル自然史博物館と追想

ニューシャテル湖畔にある宿泊先のホテルから、山道を登って辿り着いたデュレンマツ美術館でゆっくりした後、午後からは、再び山を下ってニューシャテルの街中に戻って行った。

山道を降りる道中、ニューシャテル湖の裏手に雄大な山々が広がっており、地理に疎い私は、それらの山々がアルプス山脈であることを後から知った。逆に知識がなかったからこそ、先入観を抱くことをせずに、アルプス山脈とニューシャテル湖が織り成す景観美を味わうことができたのかもしれない。

そうした景観美を堪能しながら、街中まで降りてきた。午後一番に訪れたのは、「ニューシャテル自然史博物館」である。

私に多大な影響を与えてくれた発達科学者のジャン・ピアジェは、ニューシャテル湖の生き物を研究する生物学者から科学者としてのキャリアを始めている。ニューシャテル近辺にはどのような生き物が生息しているのかを含めて、生物の進化の過程について、資料を見ながら理解を深めたいと思ったため、私はこの博物館を訪れた。

私:「こんにちは(フランス語)。」

受付の女性:「こんにちは。VOUS ÊTES ÉTUDIANT ?」

私:「私はフランス語が話せないんです。入場料はいくらですか?(英語)」

受付の女性:「ああ、学生は4スイスフランで、大人は8スイスフランです(英語)。」

私:「(九月からの身分は学生なのだが、今はまだ学生証が無いからな…)大人料金でお願いします。スイスフランを持っていないので、ユーロを使えますか？」

受付の女性:「基本的には、スイスフランしか受け付けていないんです…。コインはダメですが、ユーロ紙幣ならなんとかなりますよ。」

私:「コインはダメなんですね…。あいにく、ちょうどいい紙幣が無いんです。それではクレジットカードで支払いたいのですが？」

受付の女性:「クレジットカードも受け付けていますが、スイスの銀行と提携されているものしかダメなんです。ごめんなさい。」

私:「そうですか。であれば、残念ですけどまた次回来ますね。」

受付の女性:「本当は今日見ていかれたいですよね？」

私:「ええ、本当は。」

受付の女性:「であれば、今は他のお客さんもいませんし、無料でいいですよ。私からのプレゼントです(笑)。」

私:「本当ですか！？ありがとうございます！でも5ユーロ紙幣ならあるのでこれだけでも…。」

受付の女性:「いえいえ、それも結構です。博物館を楽しんでください♪」

受付の女性から思わぬ嬉しいプレゼントを贈ってもらい、有り難いことに、なんと博物館に無料で入場することができたのだ。無料で入場させてもらったのだから、あまり長居はできないと思っていたのだが、展示されているものが大変面白く、先ほどのデュレンマツ美術館と同じくらいの時間をこの博物館で過ごすことになった。

特にニューシャテル近辺に生息している昆虫の剥製に強い興味を示し、備え付けの顕微鏡を使って、たくさんの昆虫の剥製を眺めていた。また、実際に生きている爬虫類や小動物も館内で飼育されており、卵から孵ったばかりのトカゲに釘付けになっていた。

その他に興味をそそられたのは、珍しい鉱物たちである。多様な種類の鉱物をこれまた顕微鏡を使って眺めていると、小学校四年生の時の夏休みの自由研究で、鉱物採集をしていたことを思い出した。両親と山口県内にある様々な河川を訪れ、そこで鉱物を採集し、父と市の図書館に行って、色んな図鑑で調べていた記憶が蘇ってきたのだ。

私は自由研究と読書感想文に対してはとりわけ手を抜く方であったが、この時の研究は担任の先生から認められ、研究内容が市の自由研究選考にかけられたのだった。それもそのはず、この自由研究に力を入れていたのは私ではなく、熱心に鉱物を採取していたのは、途轍もない凝り性の父だったのだ。また、図書館において、図鑑を人一倍真剣に調べていたのは、私ではなく父だったのだ。

改めて当時の父の協力に感謝をしたが、それ以上に感謝をしたのは、情熱を持って一つのことに取り組む姿勢を、何も語らずに息子に示してくれていたことであった。こうした姿勢は、父のみならず、私の母も持っていることに改めて気づかされた。

両親が私に施してくれた最大の教育はまさに、一つのことに全身全霊を傾けて探究するという態度にあったのだと思う。一つのことに専心して取り組む尊さを、言葉ではなく、両親の実際の取り組みや彼らの姿勢から学んだことが、間違いなく今の自分を形作っていることを実感したのだ。

まさか幼少時代のこうした記憶が、スイスのニューシャテルという街で蘇ってくるとは思いもよらなかった…。その次に訪れたニューシャテル美術歴史博物館に向かうまでの道すがら、私の頭の中には、探究者としての両親の姿しかなかったし、両親から受けた影響の全てが、記憶と共に自分の全身を駆け巡るかのような感覚に陥っていたのだった。